

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

田中光顕関係文書紹介(3)

著者	安岡 昭男, 長井 純市
出版者	法政大学文学部
雑誌名	法政大学文学部紀要
巻	54
ページ	29-46
発行年	2007-03-20
URL	http://hdl.handle.net/10114/3048

田中光顕関係文書紹介（三）

安 岡 昭 男
長 井 純 市

はじめに

今回紹介するのは、田中光顕宛山県有朋書翰（卷之三、卷之七）三三三通（未完）である。

各書翰の冒頭に付された番号（算用数字）は、前号記載のものからの通し番号となっており、田中光顕関係文書研究会が付した便宜的なものである。

以下、本号掲載の書翰の概要を紹介しよう。今回目をひくのは、山県の趣味に関する記述、山県の二度目の洋行に関する記述、田中の宮内次官在任中の政治問題に関する記述、そして日清戦争に関する記述である。

二四番書翰（年代不明、二月一〇日付）と二七番書翰（明治二十一年二月一四日付）には、山県の趣味である詩作、すなわち漢詩の創作に関する記述がある。

当時の政治指導者の多くは下級士族の出身ではあったが、和歌や漢詩を作り、またそれらを鑑賞する素養を身につけてはいた。そして、定期

的に親しい仲間と会合し和歌や漢詩を作り、互いに批評し合って楽しむ趣味を持っていた。山県の趣味、例えば詩歌の創作、書画骨董の鑑賞、庭園の造成などについては、山県の伝記である徳富蘇峰編・述『公爵山県有朋伝』下巻（原書房、明治百年史叢書第九〇巻、一九六九年）に詳しい。庭園に関しては、前号において山県邸である椿山荘に言及したので、想像の手がかりとなるであろう。

山県の和歌には、例えば、次の様な作品がある。

夢の世とおもひすてにしゆめさめて

おきところなきそのおもひかな

この歌は、明治一〇年西南戦争の戦陣において、山県が敬愛し、山県の恩人でもあった西郷隆盛を、山県自身が陸軍卿そして征討参軍として追いつめなければならなかった辛い思いを歌ったものである（松崎哲久『近代百人一首』中央公論社、一九九五年）。山県の数多い作品の中でも佳品といえよう。この他、日露戦争でおびた数多くの兵士が命を失っ

た満州の地で歌った和歌にも、荒涼とした戦場の風景と亡くなった若者たちを悼む佳品がある。こうした感傷は、政治過程や政策過程を通じた政治指導者分析に直接裨益するものではないが、政治指導者のいわば人間としての原形質を知る上で欠かせない素材である。

二七番書翰（明治二十一年二月一四日付）から三一番書翰（明治二十二年四月五日付）までは、いずれも山県の二度目の洋行に関わるものである。

明治政府の指導者らが欧米先進国への視察旅行、すなわち洋行を強く望んだことは、岩倉使節団（明治四年一月横浜解纜、同六年七月岩倉具視全権、横浜帰着）に参加した大久保利通や木戸孝允らの例を見れば明らかである。彼らは、それまで来日した欧米先進国の人々や文献の翻訳によって多くの知識を得ていたが、何よりも実体験として欧米先進国のあり方を学ぶ機会を求めていた。その見聞は、その後、彼らが諸政策を推進する際に、自信と確信の裏付けとなる筈のものであったからである。

山県の最初の洋行は、幕末に高杉晋作らと共に夢見た欧州視察旅行案が、明治時代に入ってようやく実現したものである。明治二年三月に長崎を解纜し、仏、英、白、独、露、蘭、米の各国を視察したのち、太平洋を経て、同三年八月に横浜に帰着した。この洋行では、普仏戦争においてプロシアの軍隊の意気上がる様子を印象深く心に留めたという。

そして、二度目の洋行は、国防策としての海岸砲台と地方自治制度の調査を主目的に行われた。山県を中心とする一行は明治二十一年二月に横浜を解纜、翌二十二年一〇月に横浜に帰着した。山県は、当時、国内に

において内務大臣として府県、郡、市町村という各地方行政単位に関わる地方自治制度の法案作りに一区切りをつけ、改めて欧米各国の実態調査を行い、諸法案の微調整を行う心算であったようである（長井純市「山県有朋と地方自治制度確立事業——明治二十二年の洋行を中心として——」、『史学雑誌』第一〇〇巻第四号、一九九一年四月）。

山県有朋は、維新草創期に軍事制度の創設に尽力し、志半ばで斃れた大村益次郎の後継者であり、徴兵制度の創設に尽力した人物として良く知られているが、地方自治制度の創設者でもあったのである。勿論、今日、明治国家の地方自治制度に対する評価として、官治的であるとの評価が一般的であることはいうまでもない。しかし、当時においては、欧米先進国の制度にならったものであり、国内にも官治性が緩やかに過ぎ、急進的に過ぎるとの批判があったことは言い添えておかなければならない。しかも、幕末に欧米先進国との間に結ばれた不平等条約の改正にあたって必要とされた諸法制の一つとして、この地方自治制度は貢献したのである。

元来、長州閥の指導者は地方制度ないし地方経営には関心が高かった。廃藩置県を強力に推し進めた勢力が長州閥であったことは良く知られている。しかし、その後、地方経営は、強力な権限を握った中央政府の下で翻弄され、地方の衰微を招く結果となったが、それを嘆き、その改善策を強く訴えたのも長州閥であった。それらの中心人物は、木戸孝允であったが、彼らは廃藩置県という中央集権策を進めたのち、地方経営改善の観点から、今度は地方分権策を摸索し始めたのである。明治八年に初めて開催された地方官会議は、そうした地方経営改善のねらいをも有

する施策であった。

明治一〇年、西南戦争中に木戸が病死すると、翌一一年薩摩閥の領袖である大久保利通の主導の下に、いわゆる三新法（郡区町村編制法、府県会規則、地方税規則）が公布、施行され、地方制度の出発点を画すこととなった（長井純市「木戸孝允覚書」、『法政史学』第五〇号、一九九八年三月）。大久保のねらいは、中央の財政負担軽減のために、府県に地方財政協議のための権限を与えることにあった。しかし、翌一二年から各府県において発足した地方議会に相当する府会、県会が、全国的なネットワークを築きつつあった自由民権運動の活動家らの絶好の活動舞台となった。府会、県会では、制限選挙ではあったが、選挙で選ばれた活動家議員が、地方税の徴収方法およびその支出方法をめぐって、府知事や県令を批判し、さらに政府批判に及ぶという事態をたびたび生じさせた。また、府県内部の地域間対立を色濃く反映する場面を現出させた。

そのさなか、参事院議長であった伊藤博文が憲法など立憲制度の調査を目的に渡欧することとなり、山県が伊藤に代わって参事院議長を務めることとなった（明治一五年一月〜同一年二月）。参事院は、府会、県会での紛糾や対立点を審理、裁定する機関でもあったために、山県は、これを機に、本格的に地方制度改革問題に関心をよせ、自らの政治課題として意識するようになった。早くも明治一六年には内務卿として、三新法に代わる地方自治制度の包括的法案作りに着手した（長井純市「山県有朋と地方自治制度確立事業——参事院議長就任を中心として——」、『法政史学』第四五号、一九九三年三月）。廃藩置県以来ここに至るまでの間、集権から分権へ、そして分権から自治へという道を長州

閥は歩んできたのである。ただし、山県がねらいとする自治は、円滑な行政運営を主眼とするものであり、府会や県会における自由民権運動の活動家や政黨員は、いたずらに地方議会を紛糾させるもの、そして場合によっては行政権によって抑制されるべきものとして認識されていたことは重要である。それゆえに、山県が中心となって作られた地方自治制度に対しては官治的という評価が下されることとなったのである。四三番書翰（明治二〇年六月二二日付と推定）に記された府県債条例案は、そうした作業の一端を示すものである（長井純市「山県有朋と地方自治制度確立事業——地方債構想を中心に——」、『日本歴史』第三五号、一九九二年一月）。

なお、この洋行中、英国に滞在した際に、山県は地方自治制度創設への熱意を七言絶句の漢詩にまとめている。それは、次の様なものであった。

重入欧州感慨牽

燦然文物幾千年

半生事業未全遂

已有新霜到鬚辺

山県の感慨、すなわち二度目の洋行で眼にした欧州先進国の発展振りに改めて目を見張り、日本の発展を期して取り組んだ地方自治制度作りが、完成に至らずして老いを迎え始めているという感慨が表現されている。言うまでもなく、当時、欧州先進国の繁栄と日本の現状との差は依

然として大きかったのである。

山県の地方自治制度作りは、その後、市制町村制（明治二十二年四月公布）、郡制（明治三十三年五月公布）、府県制（同上）という一連の法律となって結実した。しかし、それらに定められた山県自身の地方自治制度理念は必ずしも達成されなかった。そして、結局、帝国議会と同様に、台頭する政党勢力に活躍の舞台を提供することとなったのである。

なお、明治二十二年二月一日に大日本帝国憲法が公布されたとき山県は日本にはおらず、ベルリンで憲法発布に伴う祝賀式典の模様を伝える情報を受け取っている。二七番書翰は、近況を報告すると共に、その喜びを伝えたものである。

伊藤博文と山県有朋は、長州閥の政治指導者として競合者の関係にある。良く知られているように、しばしば山県は伊藤の後塵を拝したが、政治的人脈の形成という点で、山県は伊藤を遙かに凌いだ。明治前半期、立憲国家の形成過程における政策達成、また帝国議会開設後の議会運営という点で、山県は伊藤に譲るものの、山県は政党勢力に批判的な官僚や軍人らの期待を担い、山県閥あるいは山県系と称される政治的人脈を形成し、長期にわたってそれを維持したのである。

例えば、そうした政治的人脈の中に、二五番書翰（年代不明一〇月一日付）に記述された古沢介堂、すなわち古沢滋（旧土佐藩士、弘化四年（明治四四年）という人物がいる。古沢は、明治七年一月に左院に提出された民選議院設立建白書に板垣退助ら下野した参議連と共に連署した元大蔵官僚であった。その後、官僚としての経歴を積み重ね、山県との関係が深まった。古沢は、明治初期に英国に留学した経験を背景に、

外国の新聞雑誌などに掲載された日本や東洋関係の記事を日本語に翻訳しては山県に提供していた。欧米の言語に通じていない山県は、欧米語の文献からの情報を古沢のような人々から得ていたのである。他にも古沢と同じような役割を有していた官僚や軍人がいたが、のちに山県の伝記を編纂した徳富蘇峰のようなジャーナリストもそうした役割を有していたと思われる。国立国会図書館憲政資料室所蔵「山県有朋文書」の山県宛徳富蘇峰書翰のうち、第一次世界大戦前後のものには米国大統領ウッドロウ・ウィルソンの政治姿勢に対する蘇峰の批判が縷々述べられている。

なお、今回の山県書翰に記述されている温度は、勿論、華氏表示である。「八拾二、三度」とはおおよそ摂氏二十八度、「九拾度」とは同三二度ほどに相当する。

三四番書翰（明治二十九年九月一六日付）および三五番書翰（明治二十九年十一月一三日付）は、いずれも第二次松方正義内閣（松方首相と外相として入閣した大隈重信の姓の一字ずつをとって松隈内閣と称されている。明治二十九年九月（明治三十一年一月）に関するものである。

同内閣は、薩摩閥の領袖の一人であった松方の方針により、進歩党（立憲改進黨を中心に立憲革新党や大手俱樂部など対外硬勢力が結成した政党）の事実上の党首であった大隈重信を外相に迎え、いわば藩閥と政党との提携内閣となった。

三四番書翰は、天皇から松方への首班指名の事情を伝えるものである。天皇の発言が記されていることも興味深いが、そうした発言が生々しく田中宛の山県書翰に還元されて伝えられていることも、政治指導層の情

報伝達という点から興味深く思われる。徳大寺実則侍従長が山県にもたらしした情報を田中に確認させようとしたものであろう。三五番書翰は、二十六世紀事件に関するものである。この事件については、すでに優れた研究成果がある(佐々木隆「『二十六世紀』事件と藩閥」、『新聞学評論』第三六号、一九八七年四月。同「日本の近代一四メディアと権力」中央公論新社、一九九九年)。この事件は、大阪朝日新聞社が経営し、高橋健三を主筆とする雑誌『二十六世紀』が、宮内大臣であった土方久元を批判する記事を掲載し、それを新聞『日本』が転載したことに端を発した。高橋健三は松隈内閣の内閣書記官長でもあり、そもそも同内閣は、新聞紙条例改正案など言論抑圧的とされた法律の緩和に向けた改正を条件に松方首相側と進歩党が提携して成立したものであった。したがって、その処分如何によっては、内閣が破裂しかねない危険性を孕んでいた。いったん松方首相は、両紙の発行禁止処分や発行停止処分など厳重な処分を回避し、官吏侮辱罪として事を収めようと考え、その案を上方宮相に示したところ、土方宮相と田中次官はこれに強く反発した。これを受けて、結局、『二十六世紀』は発行禁止、新聞『日本』は発行停止という厳重な処分を受けることとなった。しかし、官吏侮辱罪の適用については、司法大臣清浦奎吾の考えに沿って、これを適用しないことに決定したのである。さらに、内務大臣樺山資紀は、松隈内閣に反抗的と目されていた松岡康毅内務次官と小野田元熙警保局長を更迭し、新聞紙条例の改正を行いやすい環境作りを行った。こうして松隈内閣は、迎えた第一〇議会(明治二九年一月〜同三〇年三月)を無事に乗り切ることが出来たのである。

四七番書翰(明治二八年五月一四日付と推定)から五一番書翰(明治二七一年一月一三日付)までは、いずれも日清戦争の時期のものである。前述の通り、山県は一般的には徴兵制度の創設者として知られており、事実、軍制および軍政には終生大きな発言力を有した。しかし、こと戦争指導という点では、辛酸を嘗めている。戊辰戦争における長岡城の攻防戦での失敗(いったん占領した同城を奥羽越列藩同盟軍に奪還されてしまったというものは夙に有名であるが、日清戦争における前線からの引き上げも良く知られている。公表された理由は体調不良であるが、実は第一軍司令官として作戦上の紛議を生じ、その結果、体調不良を口実として天皇から直々に帰国命令が下され、引き上げざるを得なかったのである。戦争中のことでもあり、山県の威信を傷つけない配慮もあり、帰国後、山県は監軍(陸軍の教育全般を担当する監軍部の長官。監軍部は明治三十一年に教育総監部となった)に任じられた。上記書翰は戦況報告が中心となっている。

なお、四七番書翰(明治二八年五月一四日付)に記述されている松子という女性(山県の一人娘である。書翰によれば、彼女はその頃、大本営が置かれた広島に滞在していたようである。これが山県の帰国問題と関わるものなのかどうかは不明であるが、山県は娘が世人の噂を招くことを避けようとしている。五一番書翰の同封書翰と見られるイザベル・ジー・プリンスという女性が発した書翰(おそらく和訳であろう)には、松子がこの女性から英語を学んでいたことが記されている。松子は、山県系官僚であった船越衛の子光之丞と結婚し、外交官であった夫に従って長期にわたる海外生活を経験した。

傷心の山県を慰めたと思われる女性がもう一人いる。吉田貞子という女性である。山県は、妻友子を明治二六年に失った。その後、後添えとして、入籍はしなかったが、新橋の芸者であった老松を迎えた。この老松が貞子である。日清戦争に出征する五六歳の陸軍大将山県に対して、一九歳の貞子は、次の様な歌を送っている（松崎前掲書）。

吹く笛もしめれるゆふへかな

うき一節も音にかよふらむ

かつて長井は、山県の姻戚となった船越衛のご子孫のお宅（世田谷区在住）を訪問し、残された書翰などの史料を拝見したことがあるが、その際に、貞子を描いた掛け軸を見せていただいた。貞子は、山県家およびその周辺の人々に暖かく受け入れられていたということである。

最後に、凡例について記しておこう。史料の翻刻にあたっての凡例はすでに前々号および前号に記したところである。史料中の句読点は田中光顕関係文書研究会において適宜付したものである。段落の設定も、同様である。史料原文において表記上の誤りなどがあると判断された場合には、その個所の左脇にママと付し、原文通りの表記であることを示した。書翰末尾に付した注記事項の内、封筒がない場合には、特に註記しなかった。

なお、本号で紹介する書翰史料は、安岡昭男（名誉教授）を中心とする田中光顕関係文書研究会の研究成果であるが、全体の正確性については最終的に目を通した長井純市が責任を負うものである。

山県有朋書翰（その二）

「含雪公手簡卷之三」

以下、同巻所収の書翰。

19 明治（ ）年2月18日

今朝、條公之墓參相成候は、御同伴可致鳥渡御立寄可被下。若不能は罷出可申と存候。草々頓首

二月十八日朝

椿山莊主

青山老兄

「封筒」表、田中老閣、内啓、裏、〆、有朋。

20 明治（ ）年3月14日

其後は御起居如何や。節減論にて御配心察申候。生も昨夕来、少々微恙にて、今日は引籠り擁炉申候。御閑も有之候は、散歩旁御投杖相待申候。草々頓首

三月十四日

椿山莊主

芭蕉庵主人坐下

「封筒」表、田中將軍幕下、親展、裏、〆、椿山莊主。

21 明治（ ）年（ ）月（ ）日

此中御面晤を得候翌朝松下罷越、曾而内願致候儀に付而は、渡辺子

え御内話被成下間布との事に付、昨日既に内話致置候旨申候而已ならず、彼是老兄杯え暴論相試候様にも被察候付、老生は叱り飛し置候。猶、細縷面晤に譲可申候。草々。

〔封筒〕表、田中老兄、内啓、裏、緘、有朋。

22 明治（一）年7月3日

今日は久しふり、蕉庵山水に御起臥可被成と察申候故に、今晚は清間を不妨。若も明朝御閑暇候は、暫時得面晤度。乍去さして急用之事件には無之。一兩日中、於官邸面会を得候共、何もさし支りは無之申上置候。草々不尽

七月三夜

椿山莊主

青山老兄坐下

猶、今日も殆終日対客。為邦家と申な^マら敗軍之將は甚覺疲勞候。再

白

〔封筒〕表、田中賢台、親展、裏、緘、有朋。

23 明治（一）年3月17日

朝来約束之来客三、四人有之候に付、今朝御来光御見合被下候様相願候後、丁度十二字迄に及び、爾後、医師え約束いたし居候付、只今自外出致候。就而は明朝にても御面晤相願度、御都合申試候。草々不尽

三月十七日一時前

青山老兄

〔封筒〕表、青山田中老兄、内啓、裏、緘、椿山莊主朋。

24 明治（一）年12月10日

一昨日は懇と御来訪を願ひ多謝。其節御依頼仕候杉子には昨朝面晤。何事も無さし支相済せ安全仕候。別詩稿は高嶋より差送り候に付、供消覽候。他は拜光に残し候。草々頓首

十二月十日

椿山莊主

芭蕉庵主人坐下

〔封筒〕表、田中青山賢台、親展、裏、緘、有朋。

25 明治（一）年10月11日

古沢介堂来談。御閑暇に候は、御来臨相待申候。草々頓首

十月十一日

椿山莊主

青山老兄

〔封筒〕表、田中老兄坐下、裏、緘、有朋。

26 明治（一）年7月31日

只今帰宅仕候。御閑暇に候は、鳥渡御来訪被下度候。草々頓首

七月三十一日

青山老台

椿山主

「封筒」表、芭蕉庵主人坐下、内啓、裏、緘、有朋。

「含雪公手簡卷之四」

以下、同卷所収の書翰。

27 明治（21）年12月14日

一別後、御清寧奉還賀候。出立之節は御見送り被成下忝多謝。其後、神戸、上海、香港を経、明朝は柴棍え到着之筈に有之申候。先以海路平穩、格別之風浪も無之、一行無事罷居申候。御放懷被下度候。今夕安南海之行路にて、船室八拾三度之暑氣に有之候。明日、柴棍着船之上は九拾度以上に相成可申。反之東京は日々寒冷に趨き候付、為国家宝軀御自愛所祈候。此に到り、万里江山何日尽之旧句思起し申候。詩は更に出来不申一笑。敬白

十二月十四日午後五時安南海上にて認

含雪

青山老兄

尚令夫人え可然御一声奉憚候。此度は留すえ書状不差出、御序御一言願ひ上候。再白

「封筒」表、田中少将殿、親展、裏、緘。

28 明治（21）年12月29日

老兄倍御清康還賀之至に奉存候。

扱、曆軸殆と取れ、御多忙還察に不堪候。克命部よりは暑さ如何と懸念罷在候処、此度は有名なる酷熱之地方も、如何なる故か八拾度位にて意外に涼しく、東京にては初秋の候に均しく、誠に仕合申候。乍去、明朝亜丁着港之上は、如何可有之歟と察申候。出発前にも御嘶仕候様、大磯別荘え時々御療養御出被成度所祈候。当年も一夜二夜と相成、宜布御越歳。余事改陽之期に譲り可申候。草々頓首

十二月二十九日午後五時亜刺伯洋上認

含雪芽城山人

青山老兄坐下

尚、春畝、世外、越山、空齋、欲庵、三好、烏尾、滋野、其外將軍中えも、御出会之節、御一声所願候。令夫人え御序宜布奉憚候。再白
十二月二十九日亜刺伯洋上認

有朋

青山老兄

「封筒」表、田中少将殿、内啓、裏、緘、山県有朋。

29 明治（22）年5月10日

新緑之候、先以御健全被為涉還賀之至に候。数回之芳墨、引続き接手拝披忝多謝。先日は勅令に依り、観梅之御遠乗有之候由壯遊不堪遠察候。

扱、玉詠拝吟。二宮生等と打寄、手を拍妙と喚申候。巡遊中は歌も詩も無之、唯無風流のみに候。当地滞留中杯は、殊更相応に多事到有

之候。老後之旅行、予想外御一笑可被下候。老馬斃候由残念に候。平佐之鹿毛は、次第に駿馬之色を顕し候由、伝言致候得は大に可歎と同時に誇り顔を見可申杯申合打笑申候。留すは諸事御手数を煩し恐縮之至に候。尚、御氣を被付候様願ひ上候。小滝庵え皆はと思召立も有之由、時に御加養は所祈候。小生も此十五、六日比より、露国に向発途可致相舍居申候。奥国を巡遊之後、当地に再び帰り、夫より英国に向ひ、帰路米洲を経、帰朝之心算に有之候。于時欧洲目下之大勢は、別段相変候儀も無之、東洋は如何や。内閣は倍々多事ならんと不堪想像候。為国家御自重所祈候。草々頓首再行

五月十日

有朋

青山芭蕉庵主坐下

尚、令夫人え宣布御致意。孰えも別書不呈。御序可然御一声可被下候。再白

〔封筒〕表、田中將軍幕下、内展、裏、緘、独逸之國別林府、山県

有朋。

30 明治(22)年1月25日

新禧敬賀。先以御揃宣布御超歳通賀之至に奉存候。小生等は紅海洋上にて無事加年。御省慮可被下候。

扱、一行、去る十一日、巴里府安着。早速歐洲巡遊之目的可相達、夫々公使を以申入候処、近來政略上并に軍事上に付、独逸主義之傾向有之候付、甚困窮を極め申候。昨今、漸相運ひ候得共、充分之結果を

田中光顯關係文書紹介(三)

得候儀は六つかしき事歟と察申候。寒山枯木之景況、御憐察可被下候。又春風和氣之佳境も可有之とあきらめ日一日を送り申候。

扱又、出立之際御嘶し有之候シャツ其外取揃、此度原書記官之帰便に附し置申候。来月中旬比の出途と申事に御座候。御氣に叶ひ申候歟如何やと察し候得共、当地流行とて小生之申分は仕立屋聞入不申、丁度小生も同様之物に仕立させ申候。御笑ひ可被下候。他事後鴻に譲。時下御自重為國家所祈候。草々頓首

一月二十五日巴里府

含雪

青山老兄

尚、令夫人えよろしく御一声可被下候。于時郵便時刻にさし迫居、乱毫御推読。

〔封筒〕表、日本東京、田中少將殿、親展、裏、仏國巴里府、緘、

山県有朋。

31 明治(22)年4月5日

桜花爛漫之候、先以両兄万福敬賀。小官等無異巡遊。当節は別林府駐在、碌々消光罷在候。乍余事御放神所祈候。一月以来数回之芳翰接手拝披。日夜御配慮不堪想像候。

如貴論県会之状況は予期之形勢に不立到、其甚しきは秋田、石川、福井、三県を除之外、意外に相纏り、不認可も例年より少なきは又意外之事に候。就中、秋田県会停止之儀、高按拝承。至極之御処分と存居候処、遂に於内閣解散之所置に相決、行政上頗寛裕之裁決、所謂一

視同仁之御所置と遠察仕候。

却説、二月十一日憲法発布に付、千載未曾有之大典挙行。空前絶後、頗る旺盛を極めたる景況、実に御同慶此事に候。当日は万里天涯より一杯を挙、陛下之万歳を祝ひ申候。

扱、小官巡遊中、一二上下兩院會議之形況より、選挙之法方を目撃するに、沈着老成之論議は勿論喝采を不得、急驟過激之空論を主張するの徒は、漸次名望を博するの影響は、文運発達に随ひ尚一步を進むるの情勢也。各国歴史上之沿革より慣習を異にし、一般に論す可らざるも独り怪む。歐洲文明之今日に於て、自由政治家は陰然君主專制之精神を養成し、王党家は反而自由主義を説、互に極端に走り、行政之権力は之を中央に集攬し、其運用は變而立法府に存在し、相互利己主義を主張し、其間一國損害は不可勝数。国会は文明の華実政治家之精神とも可申と雖、其弊や國家を玩弄視するに到ては、実に不堪慨歎候。目下我國之形勢を將來に推考するに、随分予想外之困難を惹起し可申候。今より覚悟せざる可らずと察申候。此上ながら、兩兄に於て百般之準備、細思熟慮御着手不堪希望候。

青山老兄には此節各庁經費取調委員御拜命相成、別而御多忙遥察仕候。乍去、時に大磯辺御出かけ御損養所祈候。

如貴論、仏國滯留中は、丁度教師解約之一事に遭遇する耳ならず、政略上よりも幾部分敷影響を及し候情況は先便外務え向申進置候付、御聞取被下候事と不贅候。

千葉県銀行之事は、船越在勤中は嚴重に始末致候様承り及候処、此節大尻毛を出したる趣、党派之競争は拟々恐ろしきものに候。

越山兄には、歐洲御巡遊之思召立有之趣、何にも帰朝之上、委曲御相談可申上候。林三介歐洲行相決、比日巴里到着之由、不遠当地にて面晤に可接。尚、本朝之近況承悉可致候。時下為國家御自重。令夫人え可然御致声奉憚候。草々頓首

四月五日別林府に認

有朋

越山老台

青山老台

机下

尚、条約改正按も当政府は略決定之由、可賀事に付、松方大臣へ一書を不呈、可然御致意所願候。伊藤、井上、山田、其他諸彦えも御序宣布御伝声可被下候。再白

貴輪中都門之光景目前に横りたるものは、相撲社会に頭角を顯したる少年小錦の事也。数日之取組は悉勝利となり、唯無双なる大敵剣山との取結は、満場立錫之地もなき大入にて、其日の触出し、実に勝敗如何と刮目握腕花輪を競進めるに、容易に小錦の勝利となり、頗る壯觀を極めたる狀況は、小生に於て些と遺憾に存候。

比日は満山之春色。墨水、上野辺、日夕御逍遙春情如何と不堪想像候。当地は草芽漸得生も、折ふしは雪も降、春めきたる風光に不到。日夕は散步之外無之、夜間は玻璃窓下に老書生之論理を談するの聲、時に觸耳底に入のみにて、低唱淺酌はさておき、櫓太鼓の一節も酔夢に入御笑殺可被下。亜利伯ベシヤ近情御報道を忝し、御序之節よりしく一声一笑を煩度候。草々頓首

四月五日

越山老兄

青山老兄

含雪

〔封筒〕 表、日本東京、越山芳川老台、青山田中老台、親展機密、

裏、四月五日、独逸国、別林、絨、山県有朋。

32 明治（一）年12月31日

先刻は御妨仕候。其節申落し候付、即ち別翰供清覧候。唯老婆心之極は人之笑を招き候外無之と存候。猶御一考願ひ上候。乍去、到底調和之目途は無之、而目を余り傷す様致させ度候。是より帝国ホテルに立寄り春畝と談合之上、直に大磯罷越候付、如例留守中可然御頼申上候。草々不尽

十二月三十一日

有朋

田中將軍幕下

〔封筒〕 表、田中老閣、坐下、内啓、裏、絨、有朋。

〔含雪公手簡卷之五〕

以下、同卷所収の書翰。

33 （一）（一）年7月16日

昨日は軋違ひ失敬仕候。毎度恐縮に候得とも、今朝烏渡御來訪願度

田中光顯關係文書紹介（三）

候。為其。草々頓首。

七月十六日

青山老兄

椿山莊主

〔封筒〕 表、田中老台、親展、裏、有朋。

34 明治（29）年9月16日

先刻者御來訪多謝。扱、只今（十字半より）勅命を以、徳大寺侍従長來訪之大意如左。

今夕七時比、松方伯參朝拜謁之上、嚮に大命を蒙り其節篤と熟考之後、御請之有無可申上と申上置候処、何分至難之状況にて到底御請難相成との事、縷々上申せし所、陛下に於ては猶十分尽力可致旨被仰聞候へとも、兎角微力にて其任に当り難くとの事再三陳情せしに付、猶黒田議長と篤と申談可申との仰を蒙り退出せしとの事に候。其談話中、陸軍大臣の後任は何人が然る可き歟と御尋有之しに、大山大臣の申所にては川上、桂、高嶋之中にて可然との事なれば、高嶋にては如何可有之歟と上申せし処、陛下には此際は陸軍大臣の後任は軍備拡充の事業及び台湾出兵等の事有之、就而は參謀本部等と能協議をなし、陸軍行政上、神速円満に施行すへき者ならされは重要な職務は困難なるへしとの仰ありしと之事也。

其他、御談話も有之趣なれとも重要之事項は前条之次第に候。細縷拜青に譲。草々不一。

九月十六夜十一字十五分

椿山莊主朋

十一月十八日早天

田中青山老兄密啓

有朋

〔封筒〕 表、田中賢台、内啓親展、裏、緘、有朋。

青山老兄

〔封筒〕 表、青山老兄、裏、~~有~~、有朋。

35 明治(29) 年11月13日

都門之風光一報之華墨に接し忝多謝。秋晴佳期之節、倍御清勝欣然。

37 明治(33) 年4月22日

扱、先日は政務調査委員副総裁并に法典調査をも御拝命、別而御繁多不堪想察候。于時、廿六世紀雜誌之一事被仰越了承、已に論文を一読し其根源は枢要之地蟠踞しあるを想察せり。今亦貴見と符合す。之を

花時風雨多遺憾無限。昨夕も為相伺候処、御留守との事、此節は大喪其他御繁多と察候。然処、御面晤致度如何之御都合に可有之哉。今晚御閑暇に候は、参堂御面談致度申上試候。草々不尽。

法廷に争ひ難くは懲罰之手段を不可不取と存候。仮令、人権拡張之政策の方針を取と雖、現在法律之存する限りは、之を断行するに何の苦

四月二十二日

椿山莊主

慮する所がある。断然決行せされは、将来為王室又国家の為め実に憂慮不能措候。老兄以為如何。

〔封筒〕 表、青山老閣、親展、裏、緘、有朋。

白根之病氣、于今快方に不立到、甚不堪懸念、老生之氣付平田迄申

38 () () 年12月25日

遣し置候。被仰談可被下。老生は日々蒼蒼紅葉之間を逍遙し静養一途罷在候。御放伸可被下候。余事後鴻。草々復。

御清祥奉賀候。扱、勅書に付、聊御談致度儀有之候に付、寸時御来訪可被下候。草々頓首。

十一月十三日朝京都

十二月二十五日

無隣庵主

奎堂老閣坐下

有朋

〔封筒〕 表、田中青山老台、親展急啓、裏、緘、椿山莊主。

田中老兄

〔封筒〕 表、田中少将殿、親展急、裏、~~有~~、山県朋。

36 () () 年11月18日

毎度恐縮に候へとも、鳥渡御来訪相願度奉存候。草々頓首。

〔含雪公手簡卷之六内閣書記官長時代〕

以下、同巻所収の書翰。

39 明治（ ）年2月1日付山県有朋書翰

御帰途御難洪察申候。夜来降雪為に殿山之風光一層奇観に有之候。
擬、別書客秋太政大臣自被差廻一閱を遂、其俟今日迄還延に打過申候
に付、一先老兄迄御返却仕置候。勿論、今日は別段入用之建議に無之、
且客春小生自之建議書中に地方関係之要領は相認、閣議を尽し法律之
改正等も相成候事故、此俟被差置候て可然様察申候。他事拜光万禱。
勿々頓首。

二月一日

田中将軍幕下

有朋

〔封筒〕表、田中内閣書記官長殿、親展、裏、山県朋。

40 明治（20）年6月7日

学校条例外害通検印之上致返却候。此条例者最要至急候者に付、早
速御発表相成候様御配慮所願候。草々如此。

六月七日

田中書記官長殿

山県有朋

庵嵐参潭談□

嵐三談庵庵神

中空通上岩

田中光顕関係文書紹介（三）

41 明治（21）年2月2日付山県有朋書翰

過日来内話承居候様法制局長官え井上図書頭転任と申事に有之候処、
此節御決行相成候は、勅任官一等には不仰付ては不都合と察申候。
一昨年来、参事院等より元老院其外え転任之振合も不有之に付、篤と
御熟慮之上総理え御陳弁置可被下候。為其内情申述候。
小生も昨日来風氣にて未臥碌中執筆之為体に候得共、推ても午時比
には外出可仕相合居候。細縷拜青に譲り可申候。草々頓首。

二月二日

田中子閣下

有朋

県朋。

〔封筒〕表、麹町元園丁、田中陸軍少将殿、親展急啓、裏、固、山

42 明治（21）年2月25日

昨日御談合致候愛媛県知事辞表并に身退伺ひ之理由書共差出候付、
御落手之上総理大臣え御談合可然御取量ひ可被下候。藤村知事之後任
は別書白根書記官え申出候間、高知県知事交迭^{マツ}之分も一同内閣え御差
出可被下候。余事拜晤を期し可申候。草々如此。

二月二十五日

有朋

田中書記官長殿

猶、理由書は内閣一統え過日供一覽候付、内閣え御留置可被下候。
再白。

43 明治(20)年6月22日

御清康奉欣然候。扱、府県債条例并水道敷設の目的を決定するの意見書共、閣議に差出申候。御査収可被下候。井上には略談合致し置申候。勿論、府県債条例を今日発行するの儀に於ては、頗る議論可有之事に候得共、如何せん各地方土木事業等之着手之今日にては別段好工風も無之、且水道敷設及び改築之事業に付而も今日最必用不可欠ものなれば孰之途着手不致ては不相成に付、是又至急決定不致ては水道敷設之事業も甚困難を生し申候。加之、連年悪疫流行に付ては、幾百千人之生命に關する耳ならず幾百千万之財を散し、流行病之地方は不可言禍害を蒙りし事は容易に判定相成候儀に有之候。速に閣議提出相成候様御取量ひ可被下候。為其。草々如此。

六月二十二日

田中書記官長殿

〔封筒〕表、田中内閣書記官長殿、親展、裏、緘、有朋。

有朋

44 明治()年12月20日

快晴所祈候。扱、御談合致度事件出来候付、今朝拙宅え寸時御来訪可被下候。為其。早急如此。

十二月二十日朝七字

田中内閣書記官長殿

有朋

〔封筒〕表、田中内閣書記官長殿、親展内啓急、裏、緘、山県朋。

45 明治(18)年12月11日

御清適奉欣然候。扱、小生沖繩行之儀に付、今日御示談可致相考失念候付、明朝御出勤前、参堂拜晤之覚悟に候付、暫時御内居可被下候。為其。勿々頓首。

十二月十一日

田中書記官長殿

〔封筒〕表、田中少将殿、親展、裏、緘、山県有朋。

有朋

46 明治(18)年12月23日

御多忙察申候。扱、山崎太政官兼内務大書記官儀、明日御用召に有之候趣今晚承及び候処如何之都合に有之候哉。転任等之事には無之候儀とは存候得共、為念及御問合候。乍御手数御一答可被下候。万一他え転するの御詮儀に有之候へは、暫時発表御見合置可被下候。為其。勿々如此。

十二月二十三夜

田中内閣書記官長殿

〔封筒〕表、田中内閣書記官長殿、親展急啓、裏、山県朋。

有朋

〔含雪公手簡卷之七〕

以下、同卷所収の書翰。

47 明治(28)年5月14日

御無事御帰京之貴翰昨夕接手。倍御壮健遥賀之至に候。当地御滞留中は種々高話拝承、本懐不過之候。其節及御依頼置候計算書早速御送致被下、忝一覽仕候。老生留守中、総而御指揮之行届きたる結果として草庵造築は全く老兄之賜と深謝不吝候。玆、昨日已に平和之勅詔も発せられ、総督府も来る十六日、旅順口出錨に相決し、二十一、二日比には京都到着ならんと察申候。就而は二十五、六日比には多分御発聲に可相成歟と推測いたし候。勿論未御決定之事には無之候へとも、無事泰平となりたる上は、大本營を当地に立置るへき必要は更に無之事に候。故に松子等之上京は一先見合候方可然と存候。此辺御含被下御駈引所願候。

天下太平となれば随而婦人女子之談話続々惹起し小人社界之世に成、実に困難之事情不尠御推察可被下候。為国よりは身之為とも社界は老生等之生息すへき処に無之候。嗚呼。時下御自重為國家所祈候。草々頓首。

五月十四日 西京ホテル楼上にて

芽城山人朋

青山田中老兄

〔封筒〕表、東京小石川区関口台町二拾九番地、田中宮中顧問官殿、親展急啓、裏、緘、京都河原町京都ホテル、山県有朋。

48 明治(27)年8月20日

今日大本營自之報告供御一覽候。牙山之勝報御同慶。義州街道より

田中光顯関係文書紹介(三)

五、六千之兵京城に向て引返之報知も有之候へとも、先以放懷罷在候。草々如此。

八月二十日

芽城山人

芭蕉庵主人坐下

〔封筒〕表、田中將軍幕下、親展、裏、封、有朋。

〔同封〕明治(27)年8月3日付有栖川宮熾仁參謀總長宛大島義昌

少將書翰

八月三日午前九時四十分発

同 同 十一時四十分着

信濃川一日午後三時半仁川発、唯今入港、次の報告を持ち来る。

在釜山 古川大佐(取次)

七月三十一日午前九時十分七原発、二十九日朝三時開戦、激戦五時間の後、我軍全勝を得て悉く成歟駅の敵壘を抜きたり。支那兵二千八百余人にして死傷五百余人、我軍の死傷将校五、下士卒約七十名。

敵は狼狽全く分散して洪州の方向に潰走せり。蓋し群山附近より朝鮮船に乗る積りならんか。

分捕軍旗数旒、大砲四門、其他山の如し。

猶、追撃して牙山の根柢を奪へり。

大島少将

參謀總長

49 明治()年8月24日付山県有朋書翰

出軍之時機、略内決候に付、今朝御出務前、鳥渡草廬え御立寄相願度候。草々頓首。

八月二十四日

有朋

青山將軍幕下

〔封筒〕表、青山田中老台、親展、裏、絨、椿山莊主人。

50 明治(27)年10月16日

九月二十七日之尊翰今日落手被見候処、爾後御壮勇之段、遥賀之至に候。扱、国分青涯之事、被仰聞了承。今朝電報を以、貴答致候様、新聞紙之方を断絶候へは訳官に採用可致との事に内決致候。是は多分他にも何敷事情有之候事柄等出来致し、将来名義を換候て事実新聞紙報告者を相勤候者続々出来候ては不都合と申事に基き候哉に相見候。旁御含置可被下、老生自強而押付候様にては不可然、其意に任せ申候。本日は晏州に一日滞留之日割にて殆ど休暇同様故、不取敢貴答仕候。不日義州城に到着可致一大決戦覚悟にて彼是多事に有之候。秋冷日に迫り御自愛專祈之至に候。今日、当地之者に付天候取調候処、来月二十日比には水結可致との事に候。何にせ寒氣凜烈には間違ひ無之、頻に注意に付御放神是祈。草々頓首。

十月十六日朝鮮国晏州府在營

芽城山人有朋

田中少將殿幕下

尚、令夫人え可然御一声可被下。留守えも無事之段御序御致意を願、

且万事尊慮を煩し多謝。

〔封筒〕表、大日本東京宮内省にて、田中宮中顧問官殿、機密親展、

裏、絨、朝鮮国晏州在營、山県有朋。

51 | a 明治27年10月13日

拜啓 陳者大城戸宗重と申す仁より別紙に添へ合綴唐本一冊送り来り候処、憂国の情、言語の外に露はれ人をして感動に禁へざらしむる者ある様被存候に付、別封謝状相認めさせ差出し候。同人は予て御承知の様御話有之候様記憶、御送り届け方可然御取計被下度候。又、前便封入することを忘れ候プリンス女史よりの手書も別紙之通り封入差出候間、御落手被下度候也。用事のみ。草々不宣。

十月十三日

芽城山人

青山將軍虎皮下

尚々、明日よりは愈よ北進之都合に致候。

〔別紙〕

一筆申上候。……親しき松子嬢と私との楽しき間の關係は一時の事にて、何時御分れ申候もはかられずと存し、去春以来覚悟いたし居候。それ故、御教授向の特権御まかせ相成候中にこそと存し、同嬢の進取の智力に対し出来候丈の教育を怠りなく注入の事に尽力いたし候。斯く反覆教授いたし候種々の思想は今こそ目覺しき事もなくかくれ居候様に候へとも、いつか事に当り候節はかならず思ひ出して有用の時もこれあるへく候。此教育の徳は、松子嬢の御行末いつまでも失ふこと

あるまじくと存候。同嬢はいつれ他家へ適かれ候事と存候まゝ、せめて其時まで御世話申上度と希望いたし候。私か同嬢の御身のためをおもひ候真心は、父君は御別類、其他の人にはすこしも譲り申さず候。

貴君御承知之通り、私は已に多年の間、松子嬢の心力発育の有様を親しく見來り候。其発育は私の望むことく速にはあらざりしも、他日、体力と心力と十分御發達の上は、將來必大に望あることゝ存候。いま十分の発育もなきに早く已に新なる種々の責任をおはれ候様相成候は同嬢の爲め誠に遺憾に存し候。しかしながら、仰のことく無拋事にて抛なき事に従ひ候は世の中の常とあきらめ候外無之と存し候。山県伯閣下迄一筆相認め候間、乍御手数數御反訳之上、御届け下さるべく候。閣下御出発前不得拜顔、遺憾に堪へす候。乍然、閣下を凱旋陣頭に歡迎いたし候は遠にあらすと樂しみ居申候。貴君もよく御承知之通り、私共は平時にも戦時にも何事によらず日本の幸福をいのり居候。殊に此度の戦争には友人の多数、朝鮮へ出陣致され居候事故、日本軍の安否に關する新聞之到達を日々相待候こと一方ならず候。此頃大勝利之吉報を聞き欣喜之情に不堪候。乍然、此後万一の敗報も余儀なき事にて其時は真心より国のために憂へ申へく候。

松子嬢当町へ御帰之上は可成屢々訪問可致候。其中同嬢御交際上又は御家事向の御事に付き、私に相当と御認め之事も御座候は、ご遠慮なく御申越下さるべく候。其節は早速罷出可申候。交際社会に御出なされ候には、幾分に御引立不申候ては相成間敷、又交際上も御手引いたし候もの無之候ては、世間益々無益の雑談をのみ好み候様相成可申敷と懸念に不堪候。英語修業は此事に關して大に利益有之候事にて、

此爲め今日迄の処、幾分か通俗をはなれ候儀と存し……

中山様

イサベルラ ジー プリンス

〔封筒〕 表、日本東京宮内省、宮中顧問官、子爵田中光顕殿、親展、裏、緘、明治二十七年十月十三日、朝鮮国順安に於て、山県大將。

〔封筒〕 表、田中宮中顧問殿、親展、裏、緘、晏州府在營、有朋。

51—b 〔同封〕 明治27年9月27日付山県有朋宛大城戸宗重書翰

嚮に所感を述へ一書を郵夫に附して之を閣下に托す。書、閣下の尊覧を濟し得るや否やを知らずと雖とも、今其因に由り鄙懷を左右に奉呈す。

閣下今至尊之重命を奉し十万の司命を異域の地に制す。此の際に當り、閣下心中の苦慮傍人の想到し得る所にあらざるへし。前日陸海の捷報、我地に達するや、国民上下一氣相和し喜極りて殆んと狂するものゝ如し。実に我帝国の一大慶事と謂はざるへからず。是二千年來聖化の素養に由る忠胆義魂一死以て海岳の国恩に報し奉るの致す所と雖とも、蓋し又、閣下維新以來身を軍職に寄せられし軍紀戰略の夙に熟する所あり。且、閣下計を勝敗の外に画する所あるにあらざれば、豈に能く征清の偉勲を数月の間に収むることを得ん乎。然れとも盛名の下必ず重責を存し大巧の後、必ず奇窮あり。小民の情、軽く一喜一憂の感に全身を駆られ、脚根を泥裏に投着するは固より其常のみ、独り怪ひ大任重望を負ふ者にして前途の大事を省せず、唯々一回大捷の一

喜に駆り立てられ家居客に對し太白を挙げ、勝敗を杯盤の間に評し、奉天以西千里の地席捲破竹、終期を待たすして、其功収むへしとなすものあり。嗚呼、兵の大事を論する軽々斯の如し。何ぞ望を国家の鴻圖に属するに足らん乎。小生他、斯の如き談を耳にする毎に益々閣下今日の心状を想起し、半夜竦然襟を正して青灯に對し沈吟黙座以て西拜するもの其幾夜なるを知らず。夫れ功名利達の念、全く其胸間を脱却し去りて、君を思ひ国に報する情、愈々篤きを加ふるものは如今独り之を閣下に許すのみ。然れとも閣下年既に耳順に近し、年老して報国の情篤く而して功名利達の念を脱するものは其生を損するの養に於る蓋し闕如するものあり。閣下今日の一身は実には国家命脈の関する所、決して三十年前壮時の看をなすことなかるへし。小生聞く、身苦境に仕りて其心を勞するものは勞其身に及び氣血病を結ぶに至ると。此の際、宜く心を養ふを以て要となすへし。依て小生藏書中より養心の数篇を乱抽し割愛以て之を左右に奉贈す。閣下軍議の余暇、灯下意に随ふて読下し字句必ずしも解することを要せず。襟懷適する所、苦境樂地、山あり水あり、胸中洒然養心の術、蓋し天地の歆と俱に備る。請ふ、斯の書を以て夜々一服の清涼散に当てられんことを。古英雄皆て陣中に在るの日、仏を念し経を誦するものあり。又是一様の養心術と雖も、仏語経声或は陣外士氣の喪亡を来すの恐あり。小生今、閣下の境を推し言以て此に及ぶものは、閣下一日の延命は即国家一日の拠て以て立てる所を知れはなり。敢て婆心の苦慮となして一笑に附することなかるへし。夫れ戰略の事の如きは、自ら其人の在るあり。又何をか言はん。唯、半熟の戦にして止み半熟の和にして終ることなきを期

す。半熟の果、必ず此に百年の病因を媒介するの種子を存するものあり。和すれば宜しく信厚以て其款を結ぶへし。攻むれば宜しく長驅以て其地を挙くへし。激進激退は最も事に害あり、此の行や歲月の長短に關せず、国力を尽し以て最終の勝を占め得て終局の和を制すへし。事若し半熟にして決し、再挙三挙を煩すの勞を将来に遺さは氣力財源或は俱に挫折するに至るを恐る。伏して願くは此の際、閣下心を養ふて以て其身を健にし、内は内臣の利器を擁して制肘するの言を排し、外は我帝国の光榮を海外に発揚せんことを期す。以上、述ふる所、皆是倭人の餽場以て傀儡の技を窺ふに足らすと雖とも、聊か鄙懷の存する所、若し一覽を賜は、何の幸か之に加へん。奉呈数篇裝釘を施さず。閣下海容の仁を垂れ、小人礼に閑はさるの罪を問ふことなかるへし。他日、閣下凱歌師を班すの日、叩頭以て今日の罪を謝する所あらんと欲す。頓首々々再拜。謹白す。

明治二十七年九月二十七日

大城戸宗重

山県大将閣下